

表7 日本の高校生における本人評定SDQの平均得点 (標準偏差): 学校種別、男女別

全日制

	全体 (N=1415)	男児 (N=873)	女児 (N=542)
総合的困難さ TDS	10.7 (5.5)	11.0 (5.5)	10.2 (5.4)
情緒の問題	3.2 (2.4)	3.0 (2.3)	3.6 (2.6)
行為の問題	1.8 (1.5)	1.9 (1.6)	1.5 (1.3)
多動・不注意	3.5 (2.1)	3.7 (2.2)	3.2 (2.0)
仲間関係の問題	2.2 (1.6)	2.3 (1.7)	1.9 (1.5)
向社会的な行動	6.0 (2.1)	5.7 (2.1)	6.5 (1.9)

学年による平均得点の差は、仲間関係の問題は、2年生、3年生では1年生よりも有意に困難と評定された($p<.001$)。それ以外の下位尺度およびは総合的な困難さについては学年による違いは有意でなかった。

性による違いは、困難さの尺度では、女児の方が有意に情緒の問題が大きく報告された($p<.001$)。情緒の問題以外の困難さの下位尺度では、男児の方が有意に大きく報告された($p<.001$)。総合的困難さには有意な男女差が報告され、男児の方が有意に困難度が高かった($p<.01$)。向社会的な行動尺度では、女児の方が男児よりも高かった($p<.001$)。

定時制

	全体 (N=140)	男児 (N=78)	女児 (N=62)
総合的困難さ TDS	13.5 (6.0)	13.0 (6.2)	14.2 (5.8)
情緒の問題	3.7 (2.7)	3.3 (2.5)	4.4 (2.9)
行為の問題	2.5 (1.9)	2.4 (1.6)	2.6 (2.2)
多動・不注意	4.1 (2.3)	4.1 (2.2)	4.1 (2.4)
仲間関係の問題	3.2 (1.9)	3.3 (1.9)	3.2 (1.9)
向社会的な行動	5.3 (2.2)	5.0 (2.1)	5.6 (2.3)

学年による平均得点の差は有意ではなかった。

性による違いは、情緒の問題でのみ見られ、女児の方が有意に問題が多かった ($p<.05$)。

学校種別の比較では、情緒の問題、多動・不注意、仲間関係の問題は、定時制生徒の方が有意に全日制生徒よりも高かった($p<.05$, $p<.01$, $p<.001$)。総合的困難さは学校種別と性の交互作用が有意で ($p<.05$)、全日制では男児が女児よりも困難度が高かったが($p<.01$)、定時制では男女で有意差はなかった。行為の問題は学校種別と性の交互作用が有意で($p<.05$)、定時制では有意な男女差がなかった。向社会的な行動は全日制で向社会性が有意に高いと評価された($p<.001$)。